

聖書：マタイ 23：29～39

説教題：エルサレム、エルサレム

日時：2020年5月17日（朝拝）

このマタイの福音書 23 章には律法学者やパリサイ人たちへのイエス様の厳しい批判の言葉が記されています。これまでも述べて来ましたように、彼らはイスラエルの宗教に熱心な人々で、特に律法を研究し、これに従って一生懸命に生きようとする道徳的な人たちとして一般民衆から評価、尊敬されていました。その彼らにイエス様は「わざわざ、偽善の律法学者、パリサイ人」とここで7回も繰り返して語っています。この「わざわざ」という言葉は、前回も見ましたように、たとえば「ああコラジン、ああベツサイダ」とイエス様がある箇所では語られた時の「ああ」と訳された言葉と同じものです。あるいは他の箇所では「これこれ～な者は哀れです」と語られた時の「哀れです」という言葉とも同じです。これは山上の説教冒頭の「～する者は幸いです」という言葉とちょうど反対の意味を持つ言葉と言えます。あの「幸いなるかな」は、その人々が神に祝福されていることを宣言する言葉でしたが、こちらの「わざわざ」は、逆に神の祝福がそこになく、むしろやがて下るさばきを思って嘆く言葉と言えます。私たちはこの箇所を通して、何が神の前で忌み嫌われるあり方かを知って自らに当てはめ、そこから急いで離れるように、そして神の祝福の道こそを行く者であるように導かれたいと思います。前回は7つの「わざわざ」の内、6つ目までを見ました。今日は残りの7つ目から見に行きます。

まず 29 節に「わざわざ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは預言者たちの墓を建て、義人たちの記念碑を飾って」とあります。当時、1 世紀においては立派な墓を建てるのが強調されたようで、先人たちの墓を建てることについてもそうだったようです。律法学者やパリサイ人たちもそうしました。彼らはかつての預言者や義人たちの墓や記念碑を立てて、これを飾りました。そして言いました。「もし私たちが先祖の時代に生きていたら、彼らの仲間になって預言者たちの血を流すということはなかっただろう」と。しかしイエス様はそんな彼らに「偽善だ！」と言います。どういうことでしょうか。31 節に「こうして、自分たちが預言者を殺した者たちの子らであることを、自らに対して証言している」とあります。少し分かりにくい言い方ですが、イエス様が言っていることは、彼らは預言者たちを殺した人々を「私たちの先祖」と呼ぶことによって、自らが彼らの子らであること、彼らと一体であることを証言しているということ

です。そしてイエス様が言っていることは単なる肉体的な意味での子孫ということではなく、その性質をそっくりそのまま受け継いだという意味で「その子ら」であるということです。イエス様は言葉尻を捉えて何かを文句をつけようとされたわけではありません。律法学者やパリサイ人たちは、自分たちがかつての時代に生きていたら預言者たちを殺すようなことはしなかった。自分たちはこのように墓や記念碑を建てて、その人たちを敬っている者たちなのだからと自負していました。ところが彼らは目の前にいるイエス様に敵対し、イエス様を殺そうとしています。あの時代にいたら私たちは彼らと同じ行動を取らなかつたらとと言いながら、今それと同じことをここでしようとしている。まさにこれが偽善であるということです。彼らは自分たちが証言している通り、まさにその子らであるということです。

そこでイエス様は 32 節で「おまえたちは自分の先祖の罪の升を満たすがよい」と言います。この「升」は、それが満ちたら神のさばきが実行される升です。神はすぐにはさばきを実行しません。忍耐して待っておられます。しかしある目盛りの限界を超えた時にさばきを実行せざるを得ない。つまりイエス様が言っていることは、先祖たちが満たして来た罪の升を、その子らであるあなたがたがそのふちまで満たすが良いということです。もちろんそうしなさい！と勧めているわけではなく、そうするならそうせよということです。そしてその升が限界点を越えたら、さばきがその人々に臨むことになります。

そこで 33 節に厳しい言葉が語られます。最初の「蛇よ」という言葉は創世記 3 章のサタンを思い起こさせる言葉です。また「まむし」とは毒を持った蛇のことです。その子孫よ！とイエス様は言います。人間をそこまでまむし呼ばわりして良いのかとも思いますが、ヨハネの福音書 8 章 44 節で、イエス様はある人々に「あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと思っています。悪魔は初めから人殺しで・・・」と語られました。神から出た者に反対し、それを殺そうとするなら、そういうことになるのでしょうか。「まむしの子孫よ」という言葉は、すでに 3 章 7 節でバプテスマのヨハネによって、12 章 24 節でイエス様ご自身によって使われていました。その者たちはゲヘナの刑罰、すなわち地獄の火の刑罰を免れることはできないと言われていました。

そしてその人々は今後も同じようなことをするというのが 34 節です。ここではイエ

ス様によって遣わされる預言者、知者、律法学者たちのことが言われています。その人々も殺され、十字架に付けられ、また会堂でむち打たれ、町から町へと迫害される。これはこのあとステパノやヤコブの殉教、またパウロや他の使徒たちが受けた様々な迫害において成就します。イエス様は他の箇所「しもべは主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害します」と言われましたが、まさにイエス様に起こることと同じことがイエス様に従う者たちにも起こるということがここでも言われています。

こうしていよいよ積み積もった罪に対するさばきが彼らに臨むというのが 35 節です。そこに「義人アベルの血からザカリヤの血まで」とあります。これは一言で言えば旧約聖書に出て来る殉教者たちの歴史のことです。アベルとはご存知の通り、創世記 4 章に出て来る、兄のカインによって殺された弟の名前です。一方のザカリヤは歴代誌第二 24 章 20～24 節に出て来るゼカリヤのことと思われます。彼は神に背くユダの人々に警告の言葉を語ったために殺されました。ちなみにヘブル語の聖書は、私たちが手にしている聖書と並び方が違って、旧約聖書の一番最後は歴代誌第二になっています。ですから「アベルからザカリヤまで」というこの表現は、旧約聖書の最初の殉教者から最後の殉教者までという意味になります。「それらの正しい人の血が、すべておまえたちに降りかかるようになるためだ」とここで言われています。これは律法学者やパリサイ人たちがイエス様を殺し、イエス様の弟子たちをも迫害して、ついに罪の升を満たすことによってということです。ある人はなぜ先祖が犯した罪の分まで、この時代の人々に降りかかるのかと問うかもしれません。しかしそれはこれまで見て来た通り、彼らが先祖たちと一体の者たちだからです。その子らであるからです。一つの者たちとしてふさわしい報いを受けるのです。そして 36 節に「これらの報いはすべて、この時代の上に降りかかる」と言われています。すなわちイエス様がいた時代のことです。イエス様が考えていたのはエルサレムに間もなく臨むであろう大きな悲劇のことです。そのことを思ってイエス様は続く 37～39 節の言葉を発されるのです。

その 37 節でイエス様は、エルサレムに臨むであろう厳しいさばきを語るにあたって「エルサレム、エルサレム」と言われます。ここにイエス様がどんなお気持ちでおられたのかが示されています。イエス様はこのエルサレムへのさばきの言葉を喜びつつ語っておられたのではありませんでした。ご自分を殺そうとする人々に下るさばきを思って、清々した！という気持ちでおられたのではありません。ここに吐露されているのは、こ

の町に対してなおイエス様が持っておられる深い思いであり、愛であり、あわれみです。イエス様は「エルサレム、エルサレム」と2回繰り返して呼んでいます。この繰り返しのイエス様の特別な思いが示されています。そしてこの「エルサレム」とは、単にエルサレムの町一つだけでなく、この町を中心とするイスラエルの国全体、またその民を意味します。イエス様はここで「わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか」と言っています。これは旧約聖書からよく使われて来た表現です。申命記 32 章 10～11 節：「主は荒野の地で、荒涼とした荒れ地で彼を見つけ、これを抱き、世話をし、ご自分の瞳のように守られた。鷲が巣のひなを呼び覚まし、そのひなの上を舞い、翼を広げてこれを取り、羽に乗せて行くように。」詩篇 91 篇 4 節：「主はご自分の羽であなたをおおいあなたはその翼の下に身を避ける。」イザヤ書 31 章 5 節：「万軍の主は、舞い飛ぶ鳥のようにエルサレムを守る。これを守って救い出し、これを助けて解放する。」このような神から遣わされたメシヤとして、イエス様はまさにその通りに関わって来られました。「ひな」は弱い存在で、守られることが必要です。それをめんどりが翼の下で守り、支え、保護し、養育する。イエス様はそのように関わって来られました。しかも「わたしは何度」という言葉に現されているように、繰り返し、繰り返し、そのように働きかけ、試みて来られました。ところがユダヤ人はこれを望まず、むしろはねのけ続けた。神は無理やり押し付けることをしません。そのようにして私たちの人格を破壊しません。私たちの人格を尊ばれます。ですから私たちがあくまで神の働きかけを望まず、これを拒否するなら、その祝福は私たちのものにならないのです。その結果、38 節のさばきが避けられなくなります。「見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。」おまえたちの家とは、ここではエルサレム神殿、またエルサレムの町を指します。この神の都が見捨てられるのです。神の臨在がなくなり、荒廃するのです。これは当時の人々にとって考えられないことだったでしょう。しかしそれはこの後しばらくして実現します。紀元 70 年、ローマ軍によってエルサレムは陥落し、その神殿も、その市街地も破壊されます。直接的にはこのことを指しています。

最後 39 節でイエス様はこう言われます。「わたしはおまえたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」これも一見分かりにくい言葉です。最初に記されている「今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時」とは、やがての主の再臨の日を指しています。その日まで「おまえたちがわた

しを見ることはない」と言われています。つまりこれはこの時が彼らがイエス様に会う最後の時であったという意味です。ここで考慮すべき重大なことは、これがイエス様の公の場における最後の言葉であったということです。このあと 24 章 1 節でイエス様は宮を出て行かれて、24～25 章では弟子たちにプライベートに語られた言葉が記されるだけです。そしてその後の 26 章では逮捕に至ります。ですからこの 23 章 39 節は、実は一般の人々の前での最後の言葉なのです。ですから文字通り、もうあなたがたはわたしを見ることができない。いかに重大な瞬間かということになります。もしここでイエス様を拒否したままなら、もう救いを得るチャンスはなくなる。この次、イエス様に会う時は、最後の再臨の日になるからです。その時、「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」とおまえたちが言う、と言われています。この「 」の中の言葉は、詩篇 118 篇の言葉で、救い主が来る時の賛美の言葉です。イエス様がろばの子に乗ってエルサレムに入城した時、人々は 21 章 9 節でこの賛美を歌いました。それはやがてイエス様が輝かしい栄光を帯びて、まことの王として来られる時の前触れとなるものでした。その言葉を、その日におまえたちが言うところで言われています。これはどういうことでしょうか。これはその日にはすべての人が、イエス様こそまことの王メシヤであることをはっきり知ることです。今はまだ隠されていて、拒否することもできますが、やがての日には誰も拒否できない。ピリピ人への手紙 2 章 11 節：「すべての舌が『イエス・キリストは主です』と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」 しかしこれはすべての人がその日にはクリスチャンになるという意味ではありません。ヨハネの黙示録 1 章 7 節：「見よ、その方は雲とともに来られる。すべての目が彼を見る。彼を突き刺した者たちさえも。地のすべての部族は彼のゆえに胸をたたいて悲しむ。しかり、アーメン。」 ここにある通り、最後の日にすべての人はイエス様をはっきり見ます。そしてある人々は悲しみ嘆くのです。ああ～私たちはイエス様を認めて来なかった。イエス様を信じなかった。何と愚かだったことか！もう取り返しがつかない！そのように後悔しても後悔し切れない悲しみの中で、その日を迎えるのです。ですから今日見ている場面は非常に重大です。ここでイエス様を受け入れないと、もう彼らにチャンスはないのです。次にイエス様に会うのは最後の日です。その日にあなたがたはわたしを認めるだろうと言われています。しかしどういう者としてイエス様を認め、その言葉を発するのがその人の永遠を決める上で決定的なことになるのです。

以上、今日の箇所です。心に留めたいことは、これはイエス様の公の場における最後の言葉であったことです。イエス様がこれまでずっと活動して来て、最後に得たものはユダ

ヤ人のリーダーたちをはじめとする人々の拒絶でした。そして私たちが特に心に焼き付けたいのは、この人々の拒絶という応答を前にして、イエス様はどんな顔をしていたかということです。その顔は苦々しい心で一杯だったのでしょうか。怒りで一杯だったのでしょうか。やがて来るさばきを宣言して、いい気味だ！と笑っていたのでしょうか。そうではありませんでした。イエス様は「エルサレム、エルサレム」と言われました。その心はなお彼らに対する愛と憐れみに満ちていました。「何度、わたしはあなたがたを集めようとしたことか」とその思いを吐露していました。そして彼らの上に臨むであろう報いを思っただけで悲しみ嘆いておられました。この人々の拒絶という応答を受け取った最後の場面でも輝きを放っているイエス様のあわれみ、愛のお姿を私たちはしっかり心に留めたいと思います。

そしてそれゆえに問うべきは、果たして私はどうかということです。私も自分の応答によって、主をこのように嘆かせていることはないだろうか。神は旧約時代を通して預言者を送り続けて語って来られました。そしてついにご自分の一人子イエス様を送って最終的に語っています。その翼の下に生きるようにと招いておられます。この方に私たちはどう応答しているのでしょうか。今日見た言葉はイエス様の公の場における「最後の」言葉でした。ですから私たちもいつまでもチャンスがあるように思っていてはなりません。「これが最後」という時があるのです。この次、私たちがイエス様を見るのは主の再臨の日となるという、その最後のチャンスが今かもしれません。コリント人への手紙第二6章1～2節：「私たちは神とともに働く者として、あなたがたに勧めます。神の恵みは無駄に受けないようにしてください。神は言われます。『恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、あなたを助ける。』見よ、今は恵みの時、今は救いの日です。」私たちが恵みを受けないことがないように。今日イエス様の言葉に聞き、そのお姿と生き様を見つめて、招かれている間に応答する者へ、そして神が御子にあって広げてくださる大きな御翼の下で守られて生きる者へ導かれたいと思います。そしてやがての日に喜びをもって、「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」と賛美して主をお迎えし、主が導き入れてくださる栄光の御国へと入る幸いに生かされる者とされて行きたいと思います。